

町史

とっておきの話

271

只見町総合政策課

中野 陽介

只見ユネスコエコパークがめざすもの④

―只見の産業振興を図る―

今回は、地域資源を絶やさず活かしながら地域社会を発展させる只見ユネスコエコパークの取り組みについて紹介します。

「自然首都・只見」伝承産品

只見町には豪雪に特徴づけられる自然環境や天然資源が存在するとともに、それらの資源を利活用した地域独自の伝統的な生活や文化があります。それらは地域のアイデンティティーであり、次世代へ継承し発展させていくことは地域社会を維持する上で重要な意味を持っています。それは、地域資源や地域固有の伝統的な生活や文化を持続可能な形で利活用することによって、地域の社会経済に役立て、その発展をめざすというユネスコエコパークの理念でもあります。そこで、町内にある生物資源や農産物を使用した産品、あるいは伝統的な技術で生産された産品を「自然首都・只見」伝承産品」とい



▲「自然首都・只見」伝承産品と生産者の方々

うブランドとして商品化する事業に取り組んでいます。これまでに、マタタビ・アケビ・ヤマブドウのつるで編んだカゴやザルの伝統工芸品、もち米と麦芽で作られた伝統食のアメ、凍み餅・凍み大根・打ち豆・干しワラビなどの伝統的な保存食、栃餅、トチノキやクワの蜂蜜、コクワで作ったジャム、只見町の水と米で作られたどぶろく、減農薬・天日干し

のお米、乾燥豆類、伝統的な炭焼きであるカジゴ焼きでつくられた炭の消臭剤、クロモジの楊枝や箸、ゼンマイ綿毛を使ったコースターや毛鉤、轆轤引きで作られた木工製品、ブナの葉の染物などが伝承産品ブランドとして町から認定されました。こうした産品は、只見町観光まちづくり協会の郷湯里、歳時記念館、只見保養センター、河井継之助記念館、ただみ・ブナと川のミュージアム、ふるさと館田子倉などの町内施設で販売されています。町を訪れた人が町特産のお土産を購入できる仕組みが整えられています。こうした地域資源や伝統技術を活かした産品が只見町に定着することが期待されます。

ただみ豪雪

林業体験・観察の森

只見町では、戦後すすめられた拡大造林の中で、集落の背後



▲ボランティアの方と実施した「体験の森」の整備・調査(平成28年6月)

にあつた薪炭林や採草地にスギやカラマツが植林され人工林の林となりました。これらは木材を生産するために造成されたものですが、木材価格が低迷し生産コストも割高なため、経営はむづかしく、ほとんどが放置されているのが実状です。しかし、こうした人工林という資源を活かさない手はありません。そこで豪雪地帯に適応した森林管理技術の開発とその普及を目指すプロジェクトがはじまりました。これは収奪的な林業ではなく、資源の持続的な育成と活用、そして環境への負荷を最小化にする育成林業をめざしています。平成二七年、具体的な事例を示すためのモデルとなる森林を「ただみ豪

雪林業体験・観察の森」(以下、体験の森)とし、その造成候補地を公募すると、三名の方から手が挙がりました。検討の結果、黒谷の小沼昇さんが所有するスギの人工林を体験の森にすることになりました。体験の森では、豪雪地帯に適した人工林の整備、持続可能な森林管理の教育と普及、森林レクリエーション、環境教育が実施されます。平成二八年には、ボランティアの協力のもと、毎木調査(どんな大きさのどんな樹があるか)、簡易測量、歩道整備を行いました。今後は伐採作業が予定され、体験の森の整備がさらに進むこととなります。この取り組みには、ユネスコエコパークと体験の森の趣旨に賛同していただいた(株)野村総合研究所の資金提供を受けています。体験の森は野村総合研究所の社員の方々も訪れ、社員研修の場としても利用されています。